SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

オランダサッカー文化に関する調査：フローニンゲン・アルクマールを事例として

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学地域創造教育センター 公開日: 2024-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平嶋, 裕輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000562

オランダサッカー文化に関する調査

―フローニンゲン・アルクマールを事例として―

平嶋 裕輔（静岡大学グローバル共創科学領域）

はじめに

オランダは、正式名称ネーデルラント王国（Kingdom of the Netherlands）といい、江戸幕府が鎖国体制を敷いた後も貿易関係が続いていることから、西洋諸国のなかで日本とのつきあいが最も長い国ということができる（水島 2023：p.12）。独立行政法人日本貿易振興機構（https://www.jetro.go.jp/）によると、オランダは、面積が 4 万 1,543 平方キロメートルと日本の約 9 分の 1、人口が 1,781 万人（2023 年 1 月 1 日現在）と日本の約 7 分の 1 であり、日本と比較すると小さな国である。しかしながら、「オランダのサッカーは世界で最も進んでいる」（長坂 2007：p.159）といわれるように、オランダはワールドカップでの優勝こそないものの準優勝 3 回、ヨーロッパ選手権では優勝 1 回とコンスタントに好成績をあげている。また結果以上に、戦術や育成において評価が高く現在の世界のサッカースタイルはオランダをモデルに構築されたものが多い。日本おいても、オランダの選手育成システムや指導者養成、トレーニング方法に関する報告は散見される（秋田 1998, 1999；飯田ほか 2007；堀野ほか 2003；須田ほか 2019）。しかしそのほとんどが名門クラブであるアヤックス、もしくはオランダサッカー協会を対象としたものであり、未だ調査の余地はあると考える。

本稿は、2023 年 5 月 23 日～28 日にオランダで行った現地調査報告である。今回は FC Groningen（以下 FC フローニンゲン）と Alkmaar Zaanstreek（以下 AZ アルクマール）を対象として調査を行った。FC フローニンゲンでは主に関連施設の調査を、AZ アルクマールではホームで開催された試合について調査を行った。

写真 1　フローニンゲン駅の外観(2023 年 5 月 23 日　筆者撮影)

写真 2　アルクマール駅の外観（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

1. FC フローニンゲン

1.1. フローニンゲン

オランダの北東部フローニンゲン州の州都が、人口約 20 万人のこの町である（地球の歩き方編集室 2023：198)。筆者らは、アムステルダム中央駅から途中ズウォレで乗り換えを行い、約 2 時間半かけて、列車でフローニンゲンへ到着した。フローニンゲンは、オランダで 2 番目に古い 1614 年に創立された University of groningen（フローニンゲン大学）があり、37,000 人の学生が在籍している（https://www.rug.nl/）ため、若者が非常に多く活気のある町であった。

1.2. FC フローニンゲンの歴史

FC フローニンゲンは 1971 年に設立されたクラブである。クラブの HP(https://www.fcgroningen.nl/) によると、1921 年にアマチュア競技団体の GVAV がユニタスとラピディタスの合併により創設。その後、1967 年に GVAV のプロ・フットボール部門が親クラブから独立し、1971 年のエールディヴィジ昇格を機に、FC フローニンゲンに名称が変更され、新クラブとして設立された。

成績は、2014/2015 シーズン KNVB カップを優勝し、唯一のタイトルを獲得している。

ホームスタジアムは EUROBORG（以下エウロボルグ）である。

1.3. トップスポーツゾルクセントラム

筆者は 5 月 24 日、FC フローニンゲンの本拠地である TopsportZorgCentrun（以下トップスポーツゾルクセントラム）を訪れた。トップスポーツゾルクセントラムは 5 階建ての建物で、3 面の天然芝ピッチと 4 面の人工芝ピッチを併設している。トップスポーツゾルクセントラムには FC フローニンゲンだけでなく、他の企業等も入居しているようであった。今回は、室内のトレーニング施設の一部とカフェレストラン、ミーティングルームを見学した。

室内トレーニング施設は、ウェイト場が完備されているのみならず、40mのスプリントトラックが設置されていた。トップチームの選手のみならず、アカデミーの選手もここでトレーニングを行っている。また、日本ではまだ珍しいサッカーと卓球を組み合わせた競技である「テックボール」の台も設置されていた。筆者も体験したが、選手同士のコミュニケーションを図る上で、また回復系のリラックストレーニングとしても、非常に面白いと感じた。

カフェレストランは、サッカー施設にあるとは思えない落ち着いた雰囲気になっており、パソコンで作業をしている人や、本を読んでいる人もいた。壁にはアリエン・ロッペン、ファン・ダイク、ロナルド・クーマンなど過去に在籍した名選手の写真が飾られていた。また、屋内からそのままバルコニーへ出ることができ、グラウンドが一望できる。そのため、コーヒーを飲みながら練習を見学できるのではないかと想像した。さらに、奥へ進むとミーティングルームに繋がっていることから、食事をとってそのままミーティングへ移ることも可能なつくりとなっている。

1.4. スポーツサイエンティストの存在

トップスポーツゾルクセントラムを訪れた中で、一番興味を惹かれた点はスポーツサイエンティストの存在である。FC フローニンゲンのスタッフには、スポーツサイエンティストという役職が存在している。しかしながら、日本の場合は予算の関係もあり、スポーツサイエンティストという役職がある J クラブは筆者の調べた限り、鹿児島ユナイテッドのみである（鹿児島ユナイテッド HP https://kufc.co.jp/ ）。

写真 3　トップスポーツゾルクセントラムの外観（2023 年 5 月 24 日　筆者撮影）

写真 4　併設されたグラウンドをバルコニーから見た様子（2023 年 5 月 24 日　筆者撮影）

写真 5　室内トレーニング施設（2023 年 5 月 24 日　筆者撮影）

写真 6　施設内に設置されたテックボールの台（2023 年 5 月 24 日　筆者撮影）

写真 7　カフェレストランの内装(2023 年 5 月 24 日　筆者撮影）

写真 8　カフェレストランに飾られた有名出身選手の写真（2023 年 5 月 24 日　筆者撮影）

スポーツサイエンティストの役割は、主に選手のコンディション管理だと考えられる。スポーツサイエンティストは練習中の運動強度のみでなく、選手の心身の疲労も管理している。また、日々収集されたデータは、フローニンゲン大学の研究室にも共有され、大学と連携した取り組みも行っているようであった。

ちなみにFCフローニンゲンのスポーツサイエンティストはフローニンゲン大学の卒業生であり、このような大学とクラブの連携は今後日本でも重要になってくるのではないかと考える。

1.5.エウロボルグ

続いて筆者は、FCフローニンゲンのホームスタジアムであるエウロボルグを訪れた。FCフローニンゲンのHP（https://www.fcgroningen.nl/）によると、2006年からホームスタジアムとなっており、収容人数は22,525人である。このエウロボルグも非常に学びの多い施設であった。

エウロボルグは前述したようにFCフローニンゲンのホームスタジアムであるのみならず、スーパーマーケット、職業訓練学校、医療施設、映画館、カジノ、レンタルオフィスなどが入居する、多機能複合施設である。そのため、FC フローニンゲンの試合開催日でなくても利用者が多く、日本でよくみられる週末以外は稼働率が低いスタジアムとは異なっていた。

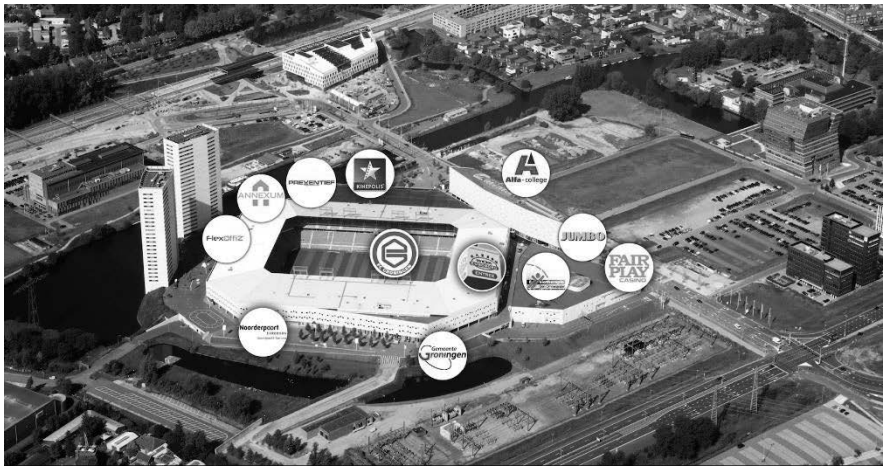

写真9　Euroborgの全体像と入居している企業
（EuroborgのHPより引用　http://www.euroborg.nl/）

写真10　スタジアム内の様子（2023年5月24日　筆者撮影）

2. AZ アルクマール

2.1. アルクマール

アルクマールは、首都アムステルダムを含むオランダの中心地、北ホランド州にある。筆者らは、スキポール空港駅から途中ザーンダムで乗り換えを行い、1 時間弱かけて、列車でアルクマールへ到着した。残念ながら見ることはできなかったが、アルクマールはチーズ市が非常に有名である。そのため、チーズ市が開催される 3 月下旬～9 月下旬の毎週金曜日は観光客で賑わうそうだ。

2.2. AZ アルクマールの歴史

AZ アルクマールは 1954 年に設立されたクラブである。クラブ HP（https://www.az.nl/）によると、1954 年に設立されたプロサッカークラブであったアルクマール 1954 とアマチュアクラブであった FC ザーンストリークが 1967 年に合併し AZ が創設された。

1978 年に KNVB カップ初優勝、1980/1981 シーズンにリーグ優勝と KNVB カップのダブル優勝、さらに UEFA カップでは決勝に進出している。しかし、1987/88 シーズンに 2 部リーグへ降格し、その後 1990 年代は 2 部で戦うことが多く、昇降格を繰り返していた。1997/1998 シーズン 2 部で優勝し再昇格を果たした後は、2008/2009 シーズンに 2 度目のリーグ優勝、2012/2013 シーズンに 4 度目の KNVB カップ優勝と好成績を残している。

ホームスタジアムは AFAS STADION（以下 AFAS スタディオン）である。

2.3. アルクマール駅から AFAS スタディオンへの道のり

筆者は 5 月 28 日、この日開催されたエールディヴィジ最終節 AZ アルクマール対 PSV アイントホーフェンの試合を観戦すべく、AFAS スタディオンへ向かった。調査のため、駅からスタジアムまでの約 4.1km の道のりは徒歩で約 1 時間かけて移動した。

まず、町の至る所に簡単な広場があり、そこに固定式のミニゴールが設置されているというのに驚いた。日本では、小さい公園の場合ボールの使用が認められないことが多い印象である。またサッカーゴールがある公園も少ない。しかしながらオランダの場合、四方を囲んでボールが出ないようにしたうえで、ゴールが設置された公園が多くみられた。これだけ見てもオランダのサッカー人気の高さがうかがえた。

次にスタジアムのアクセス方法として、多くのサポーターは自転車でスタジアムへ向かっていた。2013 年の時点でオランダ国民 1 人あたりの自転車保有台数は世界で 1 番多い 1.25 台であり、街中では車道や歩道とは別に、自転車専用道路が整備されている（水島 2023：p.186-187）。そのためか、スタジアムまでの道のりには多くの自転車に乗ったサポーターがいた。スタジアム近くでは自転車渋滞が起こっていたほどである。

2.4. AFAS スタディオン

優勝チームは決まっていたものの、最終節、かつこの試合の結果次第で AZ アルクマールの翌年のヨーロッパリーグ本選出場が決まる試合であったため、スタジアムはほぼ満席であった。筆者は以前もイギリスでプレミアリーグの試合を観戦したことがあるが、そのとき同様、サポーターは試合開始直前までスタンドに現れなかった。これはヨーロッパサッカーの特徴であると考えるが、多くのサポーターは試合開始直前までスタジアム内にあるバー等でお酒を飲みながらサッカーについて談義をしている。そのため、試合開始直前までスタンドにある席は空席が目立つが、試合が開始されるとともに一気にサポーターで埋

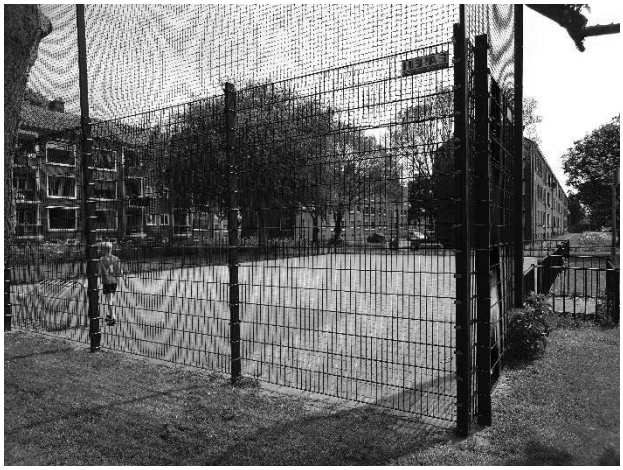

写真 11　街中にある公園の様子（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

写真 12　スタジアムへ向かう道中（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

写真 13　スタジアムと道路わきに止められた自転車（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

写真 14　自転車を押すサポーターと自転車で溢れた駐輪場（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

写真 15　試合中の様子(2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

写真 16　ハーフタイム中は観客席がガラガラになる（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

め尽くされる。さらに、ハーフタイム中も同様に席はガラガラになり、試合再開とともにぞろぞろと戻ってくる。ヨーロッパサッカーの面白い光景だと思う。

試合は、後半ロスタイムに 2 位の PSV アイントホーフェンが決勝点を決め、1-2 と AZ アルクマールは敗れた。結果にシビアなサポーターは 2 点目の失点を受けて試合終了を待たずに席を立った。またこれも面白い光景であったが、試合終了後もスタジアム内のバーは満員で、多くのサポーターがお酒を飲みながら、話をしていた。道や公共交通機関が混みだす前に早々に帰宅する、もしくは最後選手が挨拶に訪れるまで待つ、その 2 択となる日本のサポーターとはこの点でも大きく異なっていた。

写真 17　試合後のスタジアム内にあるバーの様子（2023 年 5 月 28 日　筆者撮影）

3. おわりに

今回の現地調査から得た学びを 3 つ挙げる。

1 つ目はスポーツサイエンティストの存在である。日本ではほとんどのクラブに存在しない役職であるが、ヨーロッパのクラブでは多くのクラブが採用している。ビッククラブになると自クラブに研究施設を持っているクラブもあるほどだ。サッカーにおいては、時代とともにテクノロジーが進化し取得できるデータの領域が拡大し、それに伴ってデータを扱う層も活用の範囲も年々拡大の一途をたどっている（加藤 2015）。そういった意味ではデータを扱いそれを現場に共有できるスポーツサイエンティストの存在は非常に重要であり、自クラブの研究施設を持つことが難しくとも地域の大学と連携した取り組みは日本でも必要なのではないだろうかと考える。

2 つ目はクラブの施設やスタジアムを多機能複合型にしている点である。日本の場合は、予算の関係でスポンサー企業の 1 フロアを借りてクラブのフロント業務部分を入居させているということはよくある。しかし、実際の現場にいる選手やコーチングスタッフは独自の施設や公共のスポーツ施設の 1 部を借りて使用する場合などが多い。セキュリティの面もあるので色々と考える必要はあるが、ファン・サポーターとの交流、イノベーションを生み出すためには面白い取り組みであると感じた。スタジアムにおいては、日本の場合公共施設として作ることがほとんどである。そのため、多くのスタジアムは週末稼働型である。しかし、平日の稼働率を高めるためにも、またサッカーにあまり興味のない人をスタジアムに呼び込むためにも、スーパーや映画館などグラウンド以外の施設をスタジアムに組み込むことは非常によい取り組みだと思う。実際日本でも、民間主導でサッカースタジアムを中心とした複合施設を開発するプロ

ジェクトが始まっている（長崎スタジアムシティ https://www.nagasakistadiumcity.com/）。このような取り組みが広まることにより、サッカーが好きな人はもちろん、あまり興味を持たない人にとってもスタジアムの必要性を感じてもらえるのではないだろうか。

3 つ目は自転車を活用したスタジアムアクセスである。日本のサッカー観戦における問題の 1 つとして、頻繁にあげられるのがスタジアムへのアクセスについてである。それに付随してスタジアムの移転等が取り上げられるが、膨大な費用がかかるため簡単なことではない。オランダは国民 1 人あたりの自転車保有台数が世界で 1 番多いこと、また平坦な道が続くため自転車を利用しやすいこともあり、自転車でのスタジアムアクセスを行うサポーターが多いのだと思う。しかし、健康や環境といった観点から考えると、自転車というのはある種キーワードになるのではないか。自転車を使ったスタジアムアクセスに関する取り組みは、様々な可能性を秘めていると考える。

最後に本学がある静岡市には J クラブの清水エスパルスがある。その清水エスパルスのホームスタジアムである IAI スタジアムには、老朽化や交通アクセスの悪さから、新スタジアム整備を求める声が上がっている（静岡新聞 2022）。実際、検討委員会も設置され議論は行われているが、新設するのか改修するのかいまだ結論は出ていない。新設するのであれば、官民が一体となり、静岡市・清水のまちづくりについて全体像を考えながら、サッカー関係者ではない人からも歓迎されるスタジアム建設を行っていく必要があると考える。一方改修となるのであれば、急な坂を上る必要がある IAI スタジアムまでのアクセスをどのように改善し、またどのような取り組みを行い、サポーターが足を運びやすくするのか合わせて考える必要があるのではないだろうか。例えば、静岡市では清水エスパルスのキャラクターであるパルちゃんをロゴマークとした、PULCLE という電動アシスト付き自転車のシェアサイクルサービスが展開されている。そのサービスとスタジアムへのアクセスを関連付けたイベントもアイデアの 1 つである。また、富士宮市と本学地域創造学環スポーツプロモーションコースの杉山ゼミは、坂が多く自転車を利用するには適していないと思われがちであった富士宮市を対象に実験を行い、様々な目的に合わせたサイクリングコースを作成するとともに、ゲーム性のあるイベント、マイル換算事業を提案し作成したサイクリングコースと組み合わせることで、自転車利用率を増加させ、健康づくりを進めていく可能性があることを提言している（富士宮市・杉山ゼミ 2022）。似たような取り組みを大学と連携して行い、自転車によるスタジアムへのアクセスをイベント化するのもアイデアの 1 つである。

このように、サッカー文化の先進国オランダでは日本で目にすることができない様々な取り組みが行われていた。今回の調査は短期的なもの、かつ 2 つのクラブに特化したものであった。そのため、今後さらにオランダでの調査を進めるとともに、他のヨーロッパ諸国や世界のサッカー文化を調査していくことで、日本サッカー、静岡のサッカーの発展に寄与していきたいと考える。

参考文献

秋田浩一

1998　「オランダサッカーの報告（その 1）」『駒澤大学保健体育部研究紀要』第 15 巻：1-12.

1999　「オランダサッカーの報告（その 2）」『駒澤大学保健体育部研究紀要』第 16 巻：9-18.

富士宮市・杉山ゼミ

2022　「自転車を活用した健康づくり」『公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム　令和 4

年度ゼミ学生等地域貢献推進事業』.
堀野博幸・小滝紘一・福留彰教
2003　「サッカーの指導者養成プログラムに関する研究―日本と欧州の比較―」『専修大学社会体育研究所報』第 36 巻：1-7.
飯田義明・玉井朗・大石弘道
2007　「オランダサッカーのコーチングビジョン(DUTCH VISION)について」『専修大学社会体育研究所報』第 55 巻：37-48.
加藤健太
2015　「サッカーにおけるデータ分析とチーム強化」『電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン』第 10 巻 1 号：29-34.
水島治郎
2023　『世界と日本がわかる 国ぐにの歴史 一冊でわかるオランダ史』河出書房新社.
長坂寿久
2007　『エリア・スタディーズ 62 オランダを知るための 60 章』明石書店.
静岡新聞
2022　「静岡市の新サッカースタジアム構想　経緯は、見通しは」静岡新聞 web 版.
(https://www.at-s.com/news/shittoko/1076564.html) 最終閲覧日 2023 年 9 月 25 日
須田芳正・岩崎陸・松山博明・福士徳文
2019　「サッカーのユース選手育成についての研究 ： オランダサッカーの育成システムに関する一考察」『体育研究所紀要』第 58 巻 1 号：1-8.